

# 超高精細画像自在閲覧方式の 利用記録による評価

Evaluations of a Free Viewing System for Historical Materials Adapting  
Super-High-Definition Images by Usage Log Analysis

安達文夫・鈴木卓治・徳永幸生

ADACHI Fumio, SUZUKI Takuzi and TOKUNAGA Yukio

はじめに

①歴史資料自在閲覧システムの概要

②対象資料と分析の基本

③閲覧特性の分析

むすび

## 【論文要旨】

屏風や古地図など大型で対象や文字が細かく描かれた資料を超高精細にデジタル化した画像を適用し、自由に拡大・縮小、移動して、所望の箇所を見ることができることを目的に歴史資料自在閲覧システムを既に研究開発してきた。この使い方と資料画像の閲覧のされ方を知ることは、今後の展示への適用や、閲覧システムの拡充を行う上で重要となる。このことから、国立歴史民俗博物館の幾つかの企画展示等で同閲覧システムを公開した際に収集した利用記録を基に、基本機能である画像を拡大・縮小、移動する表示制御機能が有効に使用されているか、超高精細な画像を適用することの効果があるか、一人の利用者がどれ程の時間閲覧システムを利用しているか、資料中の有意な箇所が閲覧されているかの観点から分析を行った。

表示制御機能について、想定される利用を確認するとともに、設計段階の意図や想定を超えた使用があることが示された。

閲覧の倍率について、個別資料では描かれた対象が見やすい大きさで、群資料では個々の資料が画面にほぼ一杯の大きさで表示される倍率での閲覧が最頻である。さらに拡大した閲覧がなされ、原画像の表示倍率以上の拡大も1割近くある。超高精細画像を適用することの有用性が認められる。

一利用者の閲覧時間を推定法を導入して求めた。閲覧時間は、展示での閲覧システムの設置状況に影響を受ける。立って使用する形態では、平均2分程度である。

資料画像中の閲覧箇所について時間率により頻度分布を求めた。頻度高く閲覧される箇所は解説が付与されている箇所と概ね一致する。展示する側で見てほしい箇所と利用者が見る箇所に大きなかけ離れはない。

これらの結果を、今後の展示の企画や、閲覧システムの展示および資料の調査研究の用途としての拡充に反映させることが重要となる。

【キーワード】 画像閲覧, ビューア, 展示システム, 歴史資料, 博物館資料